

新しい住まいのかたちとは何か ——持続可能性と中間領域から考える

少子高齢化のさらなる進展、家族という概念の変化、住まいと地域の関係、そしてシェア居住やサブスクリプション、IoTに代表される技術革新など、住宅とそれを取り巻く環境がかつてなく大きく変わりつつあるなかで、これからの住まいが進むべき方向、指針をどう考えていけばいいのか。大阪ガスによる実験集合住宅NEXT21で指導的立場にある高田光雄氏を迎え、今あらためて、住まうことの基本と未来像をさまざまな角度から再定義する。

入澤誠＝構成
宮村政徳＝撮影

対談

高田光雄

「京都美術工芸大学教授」

加茂みどり

「大阪ガス㈱ エネルギー文化研究所研究員」



自然との関係を意識することで豊かな住みごたえを味わう

加茂 本日は、先生にも長年ご指導をいただいている、ここNEXT21「**エ**」で、これからの住まいにとってどんな点が大切になっていくの

とすると、それとは違う非手段的な価値が住まいにはあって、私はこれを「住みごたえ」と呼んできました。人が住まいに関わるなかで獲得する真の豊かさ——特に自然との関係、自分にとって心地いい状態を、受動的ではなく能動的に探し求めないとそう簡単には得られない。そのためにも、日常の暮らしのなかでもっと自然を意識できる環境がないといけないし、風通しなどは基本中の基本という気がします。

加茂 生まれてからずっとマンション暮らしだったうちの息子は、風を通すという発想すらまったくなかったんですけれど、リフォームして風を通せるようにしたら、この窓を開けて、こっちは閉めてと、その時々で一番心地いい状況を自らつくるようになりました。そんな変化を見ていると、家にそういう操作性があるということが、居住者の能動的な気持ちの後押しするとか、住まいの力でサポートできることのひとつなのかな、とあらためて感じますね。

高田 日本の場合、季節感というのがしっかりとある。これは自然と付き合うときに、とても豊かなベースになると思います。にもかかわらず、一年中一定の温度に保つということが目標になっていく場合がある。もちろん、高齢者施設や病院などでは、そうせざるを得ない面もありますが、一般の住宅の場合、私は夏はちょっと暑いくらいがいいし、冬はちょっと寒くあるべきだと思っているんです。なにも我慢しろというのではない。季節感が感じられない家での

か、幅広くお聞かせいただきたいと思っています。

高田 NEXT21では、少々使い古された言葉かもしれませんが、住まいにおける「持続可能性(sustainability)」についてずっと考えてきました。第二次世界大戦以降の日本の住まいは、常に効率を重視して研究も実践も行われてきま

暮らしは、豊かな暮らしだとは思えないんですね。たとえば、冬は鍋料理、夏は素麺という食文化や、季節に合わせた衣替えなどの衣文化もそこに生まれてくるわけで、そうした文化を享受できる暮らしを簡単に捨てることには疑問を感じます。

加茂 四季を感じて暮らすということは、すごく日本的ですね。そうした面では、東京大学の野城智也先生が研究されている最新のIoT住宅(32頁参照)でも「ふと感じる快適さ」がテーマになっており、興味深く感じました。

高田 たとえば京町家のように、都市のなかの住宅では風通しを最も重視してきました。自然との関係を意識するなかで、家のウチとソトにも多様な結びつきが生まれるのではないのでしょうか。

家族そして社会とのつながりが多様に変化する時代の住まい方

高田 日本の住まいでは古来、ソトでもなくウチでもない、「中間的」な領域や空間がさまざまに発達してきました。具体的には、縁側とか玄関土間などの半戸外空間を挟んでウチとソトがあり、そこに建具が開閉自在に取り付けられている。そういう構造は自然と関わる面だけでなく、別な面でもメリットが大きいです。

加茂 社会的持続可能性もそのひとつですね。**高田** たとえば、人の暮らしが大きく変わり、家族構成や住まい方も変化してきているなか、

した。実際には70年代の半ばぐらいから状況が大きく変わったのに、住まいづくりはなかなかそれについていけなかった。コロナ禍で露呈した課題も踏まえて、単に効率というのではない、真に豊かな住生活を支える住まいについても一度きちんと考える必要性を強く感じます。

加茂 持続可能性ということでは、先生は以前から「環境的」「社会的」そして「文化的」という3つの点から検討してこられたわけですが、そもそも持続可能性自体は環境から始まっていると考えてよろしいでしょうか？

高田 そうですね。ただ、住宅の分野で環境というと、どうしても、どれだけエネルギーを上手に使ったか、健康にとってどれくらいプラスになるのかなど、効率面の話が中心になります。しかしそれだけではなく、人が自然と関わり、真に豊かな暮らしを育むということも、住まいにおける環境的な持続可能性を考えるときには大事だと思っています。

加茂 私はずっと京都の町家で暮らしてきましたが、外の音もよく聞こえるし、風鈴もあって風も通るような暮らしだったのが、マンションに引っ越すと音も全然聞こえず、外で雨が降っているかどうかもわかりません。その点で、自然と暮らしている感覚とは程遠い状態が続いてきたのを痛感します。

高田 住宅に関する性能の研究も進み、数値で測れる指標も増えていますが、そういう快適性のための手段的な価値を「住みごこち」と呼ぶ

単独世帯の急激な増加は統計的に明らかかわけです。今の大都市で最もポピュラーな家族構成はひとり暮らし、ということですね。ならば、住まいは全部ワンルームマンションでいいかという、決してそうではないだろう、と。

加茂 今回取材で伺った京都下鴨修学館(8頁参照)も、多くのひとり暮らしの方がシェア居住しているんですが、人間関係の面ですごく豊かに住まわれていたのが印象的でした。

高田 ひとり暮らしだから、すべてひとりで生活すると考えるのは誤りで、そこにはもっと多様な選択肢があるべきだと思います。私はそれを、生活の一部を共同化する住まい方と呼んでいます。これからの単独世帯ではバラバラに個人化した生活をつなぎとめる——たとえば、食事をするときに誰かとテーブルを囲むとか、団欒(だんらん)は誰かと一緒の空間で、というように選択的に結び直すことも考えていくべきで、そこに中間領域の役割もあるように思います。

加茂 少子高齢化が急激に進む日本では、特にそういう視点が必要になりますね。

高田 人の一生が長くなると、結果的に個人が自分のライフコースを選択せざるを得なくなる。それが混ざり合った社会では、必然的に生活単位の個人化が進むわけで、それをサポートする住まいとはどんなかたちかを考える際、ワンルームを大量につくるやり方では、豊かな暮らしを支える基盤にはならないと思います。

加茂 必要なのは、個人と個人のいろいろな関

係を、選択的に生み出せる住まいということでしょうか。ただ、そうした場合も常につながっているというわけにいかず、閉じたままでもまづいということ、簡単ではないですね。

高田 先ほど出たシェアハウスの場合なども、住まい手だけではなかなか成り立ちませんし、ほとんどの場合、サポートをしている外部のスタッフがいいます。ほかにも高齢者のヘルパーとか、子育て家庭のためのベビーシッターとか、関係は住まいの内外を問わず広がっていき、個人の自立との両立となると、従来あまり経験がありません。当然、そこにはプライバシーをはじめいろいろな課題が出てくるはずで、その解決にあたってウチとソトの間にある中間領域が果たす役割は少なくないと思います。

加茂 一方で、コロナ禍で一気に進んだ在宅勤務など、仕事面の多様化も関係してきます。

高田 高齢化という意味でも、リタイア後に自宅をオフィスにするなど、プライベートな住まいをパブリックな空間に切り替える必要が出てきている。その点、個人化が進んでいる一方で、それぞれの関係は複雑化しており、社会的な持続可能性の意味からも、中間領域を含めた住まいの多様性は広がっていくべきです。

加茂 人と人とのつながりでは、下鴨修学館でも、一人ひとりが周囲とどういう距離感、関係性でいたいのか、人との付き合いをどのように考えるのかなど、個々人がしっかりと見つめ、暮らしに向き合っておられました。それと同じ

で、家族、たとえば夫婦という関係があれば考えなくてよかった人とのつながり方を、誰もが考えていく必要がある。住まいについても、そうしたプロセスがあるはずで、ソフトとハードの両方から捉えていかなければいけませんね。

開く、閉じる、つながる、離れる 住まいに求められる柔軟な操作性

高田 社会的な環境変化に応じて、周囲との関係もつなぎ替えをしていくべきですし、個人がそれをできるようにしていなければいけない。一方、家の方がそれを拘束しているというのが今までの住まいのかたちであって、それをどう変えるかが課題です。シェアハウスのあり方を見ても、住宅計画の領域では、すでに住戸という概念がなくなっているように思います。そもそも「世帯」と「住宅」の関係はもう――。

加茂 まったく一対一ではない。
高田 ひとつの住まいをひとつの世帯全員で使っているわけでもなく、各人バラバラの多拠点居住も当たり前を境目を設定するのは非常に難しくなっています。しかもそれが固定的ではなく常に流動的で、住宅には一層強いフレキシビリティが求められている。そうした複雑な関係と変化に対して、住まい手が住まいのかたちを自由に操作できるようにしてほしい。それには、住まいを構成する空間が大きくなったり小さくなったり、くっついたり離れたりする工夫が必要で、私は「入れ子構造」と呼んでいる

のですが、複数の空間をどこまで開くか閉じるか、個人の側から操作できるようになっていないかならありません。

加茂 一方でソフトの面でも、下鴨修学館のCJFさんのマネジャーの役割とか、ADDRESSさん（20頁参照）の家守の役割とか、あとはnonieの入江智子さん（14頁参照）も人々との関係を整えていくというか、円滑にうまくいくような働きをされていて、それが住まいにおけるひとつのサービスになっているという気がします。

高田 歴史的には、たとえば大家さんと店子との関係などもそうだったわけですが、これからは住まい手自身がそういう部分をもっと意識するべきです。当然、ハードとしての住まいにおける中間領域についても、個人と社会あるいは個人と個人との関係を調整するため、これをどう活用していくか考えなければなりません。

加茂 サービスという意味では、医療や看取りの問題も無視できません。ひとり暮らしの人が亡くなるまでちゃんと自立して住める「終の棲家」というのが今はほとんど検討されていない。そのためにも医療分野や現場の専門家の方との連携がすごく重要になってきますし、さっきのフレキシビリティのある入れ子構造の住宅をどこまで開くかコントロールできるというのは、外のサービスをどんなふうに入れるかという点でも、すごく有効ですね。

高田 文化活動家のアサダワタルさんと

「住み開き」の概念を提唱されましたが、同じような意味で「まちの縁側」的にプライベートな部分を開放する――たとえば、住まいの中間領域をもう少し簡単に開けたり閉めたりできる

といいと思いますし、ワンルールの閉じた個人空間とパブリックな空間だけではない、新しいかたちを見つけていくことも必要ですね。

加茂 中間領域については、先生がしばしばおっしゃるように自分も出て行きやすいというメリットもあります。マンションでも広めの玄関土間があると、ドアを開ける前にちょっとした身づくろいがしやすいとか、高齢者が足元の不安を感じずに外出しやすいというのも、人々の関係を積極的につくるうえで意義が大きいと思います。

高田 伝統的な路地のある長屋街区では、路地空間が子どもの遊び場や身近な交流の場として活用されている。マンションなどでは効率第一の発想で廊下や階段は通行のためにしか使えません。路地は決して広くないんですが、それぞれの家とちよどい開き方につながっていて、住人相互の関係が作りやすくなっている。そうした、まちの伝統のようなものを大切に、積層化するという意味でも中間領域の活用が進んでほしいですね。

和室文化の復興と継承から見える 住まい空間の新たな可能性とは

加茂 中間領域に関しては、縁側空間とか土間

空間とか、日本の居住文化ともすごく関わっているところがありますね。文化的な持続可能性についても、お話をいただけますか。

高田 持続可能性の議論というとSDGsがすぐに思い浮かびますが、じつはあのかなには文化的な側面があまり含まれていません。ゴールやターゲットの拡張も議論されています。実際、私たちの住まいを考えると、文化的側面は大きなウエイトを占めているはずで、グローバルゼーションで世界中似たような住まいや住生活が広がるのが、本当に豊かな暮らしにつながると思えない。場所ごとの気候風土に合わせた文化的条件、地域ごとの歴史、住まい方の蓄積を生かした住まいを未来に向けて考えていくべきではないでしょうか。

加茂 日本の場合、いわゆる和の暮らしというのがどんどんなくなった時期がありますが、最近若人が再評価して、町家をDIYでリノベーションしたり、集合住宅に土間をつくらたり、風通しを考えた住宅にしたりというのが、かなり増えているような気がします。

高田 建築学会でも、和室の研究会が『和室学』（2020年）という本を出版するなど、和の住まいに関心が高まっています。たとえば引き戸――これは閉めた状態が定位置の開き戸と違い、必要なところで固定できるため、先ほどのウチとソトを開けたり閉めたりする調節に無限の選択肢がある。また、開き戸のような枠がなく、引き戸が構造体に直にはめ込まれている

中京・風の舎（京都市中京区）

設計：三澤文子（Ms 建築設計）+ 加茂みどり（大阪ガス）
マンションをリフォームし、間口幅の玄関土間（写真左）が中間領域として各個室の自由なアクセスを可能に。中央廊下の「図書室」（同右）を中心に3本の風の道を設け、日本の気候風土に合った和の住空間を集合住宅の一住戸に実現した。第35回住まいのリフォームコンクール国土交通大臣賞受賞。 撮影／畑拓



